

7.

俳句はもとより、伝統の文学としての一つであります。  
自然を愛する日本人が、血の流れの中に先祖より遠く受け継いできた詩の形式が俳句であります。

この種の形式を自分勝手に壊したり変えたりすることはできない。例えてみれば角力のあの土俵があるようなものです。土俵が狭いからといってあれを取り除いて自由な広さに改めたら、それはもう角力の魅力がなく、角力にはならない。これと同じ道理ですから、俳句は十七音という短詩型に不思議な魅力を持たせていると言えます。

俳句の容器にもる内容を新しいものにすべきであります。新しきは重要な要素です。現代に生きる日本人の感覚なくしては新しいものが生まれません。つねに生々とする自然を見つめ、借り物でなく自分の目で見、心で感じ、自分の創造意欲を發揮しなくてはなりません。

これを。「古壺新酒」という短い詞で虚子先生が示されたのです。

伝統の文学である。しかし伝習ではないという点を強く戒めておきます。

8.

私は長い間俳句に携わってきたおかげでしょうか、私たちが生存する風土のありがたさを忘れてはならないと思います。あけくれ私たちの接している大自然から量り知れぬ恩恵を受けて生きているのです。ずっと前に自然を征服するという言葉が流行したとき、こんな言葉は間違いだと抵抗を感じました。

近ごろ公害を喧しく言うようになり、自然保護という言葉を目撃いたします。  
これも主客転倒で、自然がいつも私たちを救っているのにそれに気づかず、人間が自然を保護せよという意味が愚かでありませんか。

自然を愛する心を喪失して、人間が神を忘れ増上慢をつのらせるから、今日のように人間が住めなくしてゆく、それを尤もらしく自然を保護せよと叫び出す。

「松のことは松に習え」と芭蕉が言ったのは俳句だけのこととせず、徹底して自然に帰一する謙虚の一念を燃やすことを悟りたいものです。

日本は水に恵まれた国であるが、その水が命を脅かすようになったのは、誰の犯した罪であるか、われわれはよく反省しなくてはなりません。

9.

俳句はよく滑稽を詠む。ユーモアを感じるとき笑いの表情が綻びます。

最近甲虫が流行で伊吹山で一匹百円とあり。町で買うと三百円もするそうです。驚きましたね。

一筋に糸まっすぐや甲虫 高野素十

細い糸に繋がれている甲虫が這いだした。が糸の長さ以上の距離へ行くことができない。つまり糸に制約されているのですが、それを知らぬカブトムシは懸命に足がいているためにピンと糸が張っているところを見ると何か哀れであり、またその偽りなき実景がおかしみを示します。

ごみを掃き取ろうとして庭隅にかがみました。こそこそと這い出た一匹の昆虫と衝突したので私も昆虫も同時にハッとしたのです。すると間もなく臭い空気が鼻に流れてきました。この虫の放った排気ガスでした。ミイデラゴミムシを放屁虫と俳句では詠んでいます。

放屁虫貯えもなく放ちけり。相島虚吼

貯えもなくは面白いですね。危険を感じた虫の慌てぶりが見られます。この滑稽さは前の句よりもよく理解できます。でも前の句は目に捉えたありのままを描いて、滑稽はその景色の裏にびったり附いているのであります。